

道徳科
五年
地域教材

三次市立神杉小学校

『神杉大田植』は地域の自慢

♪ ヤーレ早乙女さんよ 並び立てりや唄だす
ソウシャイ ソウシャイ
並び立てりや
ヤハーハイ 唄出す並び立てりや
♪

今年も、にぎやかに『神杉大田植』が始まりました。きれいに飾られた三頭の花牛が、ゆっくと田んぼの中を歩いて代かきをします。そして、田の神様を迎える儀式である「さんばいおろし」が終わったら、サゲ衆の合図で早乙女さんたちが苗を植え始めます。サゲ衆とは、田植をリードする人たちのことで、太鼓をたたく人、鉦（かね）を鳴らす人、唄をうたう人、苗を植える目印が付いた綱を持つ人、苗を運ぶ人など、いろいろな役割があります。早乙女さんたちは、サゲ衆の唄に合わせて合いの手を入れながら、苗を植えていきます。

六月の空の下、田んぼの周りには大勢の人が集まります。盛大に行われるこの『神杉大田植』に、毎年神杉小学校の五年生が早乙女役として参加しています。

今も残る田植歌本とモンテン



神杉地域は昔から農業が盛んな地域で、米どころです。人と人のつながりが強く、みんなで協力し合って生活してきました。機械がなかった時代、田植は重労働でした。その大変な仕事も、隣近所で助け合って行っていました。大田植も、特別な行事ではなく、神杉地域のいたる所で行われていました。はやしに合わせて唄をうたいながらみんなで助け合って行う田植は、とても活気あるものでした。

けれども、農業の機械化が急速に進み、田植も当然機械化され、手作業による田植はなくなり、昭和四十三年が最後となりました。

「大田植を再現しよう。」

と、大田植実行委員会が組織されたのは、平成十七年（二〇〇五年）七月のことでした。実行委員長は、当時神杉地区自治会連合会の会長であった山田幸三さんです。どのような思いで取組を進められたのか、その時の様子も交えながら、お話を聞くことができました。

山田さんのお話は、次のような内容でした。



昭和43年6月 田原家の田植

古くから農業が盛んなこの地域で、まちづくりのため「できる」とはないだろうか、地域を活性化するためにはどうしたらよいだろうか、と考える中で思いついたのが「大田植」の再現でした。稲作文化の伝統を継承するとともに、神杉地域の将来への「夢」を創造し、発信しようと考えたのです。

神杉は米どころです。それを絶やしてはなりません。米を作る者が頑張り、そしてみんなにも米を食べてもらいたい。生産と消費の両方が大切なのです。そこで、「大田植」で生産者と消費者の交流体験を通して、地域の活性化を図ろうと考えたのです。

私は子どものころ、父親がサゲ役をするのを見てきました。その経験から、何を準備すればよいかを考え、仲間い声をかけました。神杉は何ごとに対しても大変協力的な地域です。話を聞いた人たちが、道具や衣装を貸してくれました。田んぼは、松田敏昭さんが提供してくださいました。ゼロからの新たなスタートでしたが、たくさんの人の協力のおかげで、準備は着々と進みました。

そうして、実行委員会を立ち上げてから一年後の、平成十八年（二〇〇六年）六月十一日、記念すべき「第一回神杉大田植」を開催することができたのです。その時の喜びは、今でも忘れられません。



その後『神杉大田植』は、毎年六月の第二日曜日に開催されています。大田植と、五年生による体験田植、来場者による交流田植、そして、田植が無事に終わった後は、労をねぎらう「代みて演芸会」が行われます。広く県内外から多数の来場者を迎える、神杉の自慢の行事となっています。

「子どもたちが農業について学び、田植を体験することや、地域の若者が参加することで、

『神杉大田植』は農業文化として若い世代へ引き継がれています。これから先、五十年も百年も続いてほしいと思います。そして、神杉地域の特色として、もっとたくさんの人に知っていただき、神杉がさらに豊かになることを願っています。」

と、話を締めくくられた山田さん。そのおだやかな眼差しは、神杉の未来を見つめています。



田植をする五年生

【取材に協力してくれた人】高杉町 在住 山田 幸三 様

【文責】深田 真規子